

自然のつながりをテーマとした中学生向け環境学習プログラムの作成と実践

古家 智重子（社会人コース）

1. はじめに

環境問題は多種多様でその解決には時間とコストがかかり、それでも完全に解決することは難しい。遠回りかもしれないが学校・地域・家庭が連携して、自然や命を大切にする子どもを育てるという共通認識を持ち活動していくことが大切である。本課題研究では、活動範囲が広がり情報量も増え学校や社会生活に大きな変化がある中学生を対象に、自然環境との関わりに気づく目を育む環境学習プログラムの作成と実践に取り組んだ。

2. 環境学習プログラムの作成と実践

本プログラムのねらいを「①自然のつながりに気づく眼を育む」と「②身近な自然の大切さを感じる」の2点とし、福井県の中学1年生を対象に実践した。プログラムの内容は「生き物の気持ち」発見隊と称する班単位で行う学習活動である。1つの班の人数は、6～7人とした。前半は自然観察を中心とした屋外活動で、後半は見たもの感じたことを班みんなで考えてひとつの「生き物の気持ちの」詩としてまとめる室内活動である。生徒は「生き物の気持ち」発見隊活動指示書（活動指示書・記録ノート・地図の3枚1組）と「生き物の気持ち」の詩のつくり方に従って活動していくこととした。実践日は2009年6月5日（金）で、場所は福井県立三方青年の家である。対象生徒は3学級78人で午前のAグループ（38人）と、午後のBグループ（40人）の2グループに分け同じ内容のプログラムを行った。各グループは、6班ずつに分かれて活動した。

3. 実践の結果と考察

プログラム実践直後の質問紙調査では、「問6. 活動課題は難しかった」以外はA・Bグループにほとんど違いがなく、大多数の生徒（90%以上）が肯定的な回答であった。この問6は「そう思う」と「どちらかといえば思う」を合わせた割合がAグループの5割強に対してBグループでは3割強である。この2割の差は午前の室内実験の授業に比べ、午後の「生き物の気持ち」発見隊活動の方を易しかったと感じた生徒が多かったとも考えられる。問8でAグループの「知らなかったことを学べた」生徒は、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた割合が100%であり、問6との関連からも活動課題は難しかったとした生徒の方がよく学んだのかもしれない。また、記述式設問の「発見隊の活動で学んだこと」では、「自然のつながり」関連の記述は32%ほどと予想外に少なかった。自然のつながりや関わりについての理解不足や観察時間の不足が考えられる。

4. おわりに

多くの生徒は、環境学習を難しく特別な授業と捉えているようなので、身近なものや自然のものを工夫したプログラムがよいと思った。また、プログラムは簡単で分かりやすいものが良いとは限らないので対象年齢を十分把握し、少し難度があり考えを深める要素と楽しいことやチャレンジできる要素の入ったプログラム作りを心がけて、子どもたちの環境学習を支援していきたい。